

浄邦縁熟して、調達、闇世をして逆害を興ぜしむ

浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまへり

これすなはち権化の仁

『教行信証』にあるこの御文は、常に私のこころのどこかにあって「こと」があるたびに思い返す金言となっています。「こと」というのは、あまり好ましくない事態のことです。

私もそうですが、普通、仏教について語るとき、それを心地よいものとして、とてもやさしく、ありがたいものであるという側面を強調することが多いように思っています。それについて異論はありませんが「逆害」という苦の話の話を抜かしてのそれは、はたしてどうなのかと、私は考えるのです。

私が自分の生活に目を向け、周りの人たちを見てみると、気心の知れた仲間もあれば、不快で迷惑、しかし切ることができないという関係も少なくありません。人間関係の良し悪しは、自分の利害を基準に決めているようで、利害にとらわれぬ関係構築能力を、私は今のところ持ち合わせていないようです。

そんな私が「こと」あるごとにこの御文を思い返して感じ入るのは「逆害」を強調するのをためらう気もありますけれど、救いを求める悪人「韋提」が念仏を称えるようになった縁が「調達」や「闇世」の悪行にあったということなのです。

